保育實際家の貴さ

倉橋惣三

貴いのは、保育の實際に當る人々こそである。いくら保育の必要論が論ぜられても、いかに保育研究が研究せられても、保育實際家の實活動がなかつたら、それは陣太鼓の響き、紙上明細圖に過ぎない。保育實際家、すなはち保姆諸君のみが、子どもにぢかに觸れるのである。子どもと一つしよに遊ぶのである。子どもを手を以て世話をし導くのである。その他の者は、その後ろに居り、傍に居り、時に上に居るにしても、間接者である。その熱心も、周到も、所詮は保姆諸君を通してのみ、子どもに達し得るのである。

だから保育論者と、保育學者とに、苟も敬意を拂はないといふのではない。その人々は、保育實際家に働き場所を設け、その働き方に就て考慮し工夫する。その意味に於て、保育實際家を動かしたり、導いたりするほどの有力なる存在である。そこで、謙遜柔順なる保姆諸君自ら、その指圖下と教導下とにのみ、自らの位置を意識するのが普通である位である。しかも、そのうるはしき秩序と自省との裡に、自ら光る輝かしさは、實際家の實際性そのものである。心づいてその輝きを凝めるものには、眩ゆさに立ちつくすばかりである。そして明確に認識させられることは、保育實際家の力によることなくして、一日も保育の出來ないといふ、今更言ふまでもない事實である。

斯う書いて來て、われらはなにも、保姆諸君に餘計の讃辭を弄したり、その功をおだて上げたりしやうとするのではない。それどころか、その保育知識、保育技能に對しては、讃辭の反對のものを呈し、おだての裏のものを感じたりさへさせられることのあるのを直言する。たゞ、假りにどんな深い保育知識、細かい保育技能にしても、保育實際家を俟たずしては、いやはや、どうともすることの出來ないことを、その直言と共に自認するのである。もつと端的にいへば、自分に

出來ないから、出來得る人にこそ直言もするのである。

○

保育實際家こそ貴い。しかも、その貴さは、その人にあるといふよりもその「實際」にあるのであることは、その人としても、外からその貴さを思ふものとしても、混同してならない要點である。それを聊か鋭く言ひ換ゆれば、「實際」を失へる保育實際家は、それが保育實際家の位置にある人であつても、必ずしも貴しとすることは出來ない。それは、當然確把すべき實際を、當然確把し得べき實際を、怠りなまけて失つてゐるのだからである。

但し、保育實際家をして、その貴い「實際」を失はしめるものは、その人の倦怠によるのみに止まらない。その折角くの實際確把の能力をして、充分に發揮せしめない諸般の外部事情によることも稀でない。その場合、その責任は、少くも部分的に、保育實際家以外にあるのであつて、保育實際家にとつては、まことに氣の毒の至りである。が、しかし、保育實際家の貴き所以がその「實際」にこそ存するといふ一般的條理を變へることは出來ない。

○

之れを逆にしていへば、その人の他の價値によることなしに、實際保育者の「實際」は貴いのである。之れを更に精しく言へば、その人の他の價値は、實際保育者としてのその人の價値に加ふるところがあるではあらうが、反對に、その人に他の價値のないことが、實際保育者としてのその人の價値を減ずることにはならないといふことになる。それ程に、その「實際」に絶對の貴さがあるのである。

すなはち、その「實際」の貴さは、その人の教養の程度を問はない。その人の世故の經驗を問はない。況んや、その人の社會的位置を問はない。それどころか、世の手腕に勝れて「實際」の貴さに缺けてゐる人さへ無いといへまい。學の頭腦に秀でゝ「實際」の貴さに薄い人さへ無いといへまい。といふは、「實際」のみが何より貴いといつてゐるのではない。實際保育家の貴さは、一つにその「實際」にこそ存することを極言してゐるのである。すなはち、われらは、その人が若からうが、位置が低からうが、失禮ながら極くの新案であらうが、その「實際」に對しては、いつでも深い敬意を表するのである。そ

して又、すべての實際保育者諸君に、その「實際」に於て自重自愛せられることを希ふて已まぬのである。

○

實際保育者の貴さは、その「實際」以外の何物によつても加減せられないこと、前に言つた。しかし、之れは實際保育者の客觀的貴さに就てゞある。實際保育者たることそのことの貴さに、外から敬意を表して言つて居るのである。しかも、その人自身に於ては、この貴さの自覺に基き、その貴さの十全の實現のために、その「實際」を、よりよき「實際」たらしめるための多くの努力を必要とせざるを得ないであらう。そして、その人間修養を、その文化教養を、その技能練磨を、その「實際」に集注せしめ、集結せしめることに意を用ゐなければなるまい。

實際保育者とは、「實際」を以て保育を行ふばかりでなく、「實際」に於て保育を高める人でなければならぬ。「實際」以外に於て、保育を高めることも必要であり、之れに當る者も亦、その意味に於て尊重すべきは勿論である。しかも、「實際」に於て保育を高める人は、實際保育者のみである。その他にはない。われらが心から實際保育者に敬意を感ずるのはその故である。

幼稚園關係者は廣い。その各方面からの力の綜合によつて、我國の幼稚園は、高められなければならぬ。しかし、その大綜合の中で、最も中心の位置を占めるものは、なんといつても實際保育者諸君である。――私は、仙臺市に開かれた全國幼稚園關係者大會の二日を、斯う考へ續けながら、其の會場に緊張を持してゐた。（十月十五日誌）